

同志社香里中・高校の三十年

上野直蔵

本年は同志社が元、山水中学校を合併して同志社香里中・高校を創設してから三十年になります。そしてその初代の校長は今亡き山田貞夫先生でありました。記録によりますと、昭和二十六年（一九五一年）の六月二十二日に着任され、その年の九月にはすぐ香里学園の授業を開始しておられます。ご就任の前後に私は何回かつれだつて香里ヶ丘に出かけました。そうした訪問の最初の時であった、と思います。山田先生とご一緒に香里の校内を散策しながら交わした、いくつかの会話をなつかしく、あざやかに記憶しています。現在のグラウンドの北側に立って、なだらかな斜面に広がる水田を見下ろして「美しい眺めですね、見通しがきいて広々としています。教育環境としては最適です。」「実はあの水田も買収して校地にしたいのです。」山田先生は新学園の教育行政

で頭が一杯であつたのです。旧体育館を見て廻つては、柔道場の床下スプリングのよく利く素晴らしさに感嘆したのも忘れ得ません。「香里中・高校は男女共学になりませんか。」と問えば「上野さん、見て下さい、この淋しい場所では、とても女子の通学はさせられませんよ。」「なるほど。」など。

山田先生は同志社大学予科長を捨てて、新制度の同志社高等学校が岩倉に創設されるや、その校長を自ら引きうけて難局をきり開き、さらにまた山水中学校が同志社香里中・高校に合併されるや、敢然と初代校長となつて難関にうち当られた方で、現在の諸先生方は山田校長の古武士のごとき面影をしのびつつ、また、先生の、ことに当られては烈々たる精神をもつてせられた、その精神が今日もなお脈々として香里学園に息づいていることを実感されるであります。

同志社が元の山水中学校と合併して同志社香里学園を発足させるからには、同志社の伝統に即した校風を、この学園に創り上げねばなりませんでした。それには、元の中学校の先生方の中へ、新たに同志社からどのような先生方に新しい同僚として入りこんでいただくかが重要事でありました。そこでその選考の委員会が組織されました。当時の総長事務取扱大塚節治先生、山田貞夫同志社高等学校長、加藤延雄同志社中学校長、それに私（当時、文学部長）の確か四人がその委員会のメンバーとなつて鳩首協議を重ねました。最も肝要なことは、新しく香里に赴任される先生は、もとと香里学園におられた先生たちとよく相和して教育にあたっていただけの方々を選ぶのだければならないということで、このことはすべての委員の一致した見解であり、方針でもありました。

それから三十年後の今日、校地、校舎は大きく變つて立派になりました。かつての通路は畦道さ

ながらの狭いものでありましたが、今ではアスファルトの巾広い通路となり、春には桜花が爛漫と咲き、匂います。同志社学園では第二基目の良心碑も建ちました。木々は成長して年輪を加え、特にさつきの頃は緑が目にしみます。すべてコンクリートの本建築となり変ったその中に、木造の古びた本館のみが、昔の面影を残したまま健在であるのが、たのしく、かつ、なつかしく思われます。ちなみに今、明誠館の屋上にある天文台は下山敏男先生が校長時代に、現校長の北川博造先生が中心となって設置されたものであります。

私も日本人は十年をもって、ひと昔として、一応の星霜の古さを感じとっているようでありますが、一方、西欧ではこの「ひと昔」の三倍の約三十年をもって一「世代」としています。「世代」というのは、子が十分に分別のある年令に成長し、責任をもって親に代って対社会的な生活を営みうるようになるまでの期間をさしています。そうでありますと、この度の同志社香里学園創立三周年は、まさに三つの「ひと昔」、さらにそれはひとつの「世代」を記念していることになります。

しかしこの、物質の利器があれよという短時日のうちに古^{ふる}りていく情報革命の時代に、三十年は容易ならざる歲月であつたことを実感いたします。ここにひとつの節^{ふし}というものを意識して、その三十年の本校の歴史を顧みるべきであります。すなわち、最初の「ひと昔」はキリスト教主義と新島精神の普及に専念したとき、次の「ひと昔」は建築物を含めた量的拡充につとめたとき、最近の「ひと昔」は教育の質向上をかちとつたときと観じ、しばし立ちとどまり、思いを新たにすることとは意義深いことでありましょう。もし今後にあつて新たに強調すべきものがあるとするならば、それは明確な思考力と明確な表現力とを養成する教育目標を基底にすえらるべきかと存じます。このようにして香里学園の教育がこれからの時代の要請に適確に応え、その使命を全うしていくよう

に一層のご努力が期待されるところであります。

先程「三つの昔」をいささかきれいすぎるほどに整理してみました。創設当時より同志社香里中・高校の歩みをみつめてまいりました私などは、殊に山田初代校長の創成期における苦渋とご苦労を終始拝見してきましたが故に、この三十年は大変な試練の連続であったことを十分に認識しております。神が人にそれぞれ与えたもうた才能（タラント）をもってしても、こと意のままにならず、拱手嘆息することはあるものです。それは勇ましい、雄々しい、叙事詩風の前進の歴史というより、地味な忍耐の歴史であった、と言ってもいいでしょう。ご存知でありましようが、イギリスの詩人ミルトンが、己れの宗教的理想を托した政治の瓦解に遭い、さらに両眼盲いて、自分の召命の仕事に疑問を抱いた一時期に詠った十四行の詩がありますが、思わず呟くミルトンに、「忍耐」がこう語りかけます。「神の求めたまうは、人の業にあらず、おん賜にもあらず、やさしきおん軀（くびき）をいとよく忍ぶ者こそいとよく仕うるなれ」と諭すのです。よく耐えるものもともとよく仕えるものだ、というのであります。私は同志社香里中・高校の三十年間の中にこの「もともとよく仕えた」歴史を読みたいと思います。三十年間の関係者の方々のそれは「祈り」でもあったのです。

同志社香里学園の創立三十周年に当り、過去を深く省み、将来の発展充実を祈念するものであります。

（同志社総長・理事長）

三十周年を迎えて

北川 博 造

香里の丘に同志社の中学、高等学校が出来て、今年で三十年になります。私達香里の関係者は、何となく香里は新しい学校だという感じが抜け切らず今日まで来たわけですが、考えて見ますと、同志社のものが生まれて百余年、その凡そ三分の一に当る年月がこゝに経過している事になるわけです。三十年の歳月は、人の一生にとっては、ほとんどその活動的な全期間にも相当するものでありましょう。昭和十五年（紀元二千六百年）に、偕行社中学として発足したこの学園は、或る意味では、創立期の同志社と同じように、風雪の中にその生誕の苦しみを味わったといえると思います。これより三年前の昭和十二年の七月には、日支事変が勃発していましたし、その事変は、識者の憂ひをよそに、拡大の一途をたどり、その頃には、次第にその前面に、大国アメリカの影が、大きなのかかって来ておりました。私は、今でも、その当時の国の内外の様子を、まざまざと思い浮べることが出来ます。

昭和十五年の偕行社中学の創立当時、たまたま中学一年生であった私にも、我が国が置かれていた国際情勢や、国を覆っていた重苦しい空気、さし迫った大戦争の予感に怯えながらも、現状打開への軍事的、政治的な回天策への一縷の期待感と云ったような、当時の国民が醸し出していた一種

名状し難い不思議な空気を肌に感じておりました。

アメリカで「火星人襲来騒ぎ」があつたのは、その少し前頃であつたと思います。H・G・ウェルズの空想科学小説「宇宙戦争」をラジオドラマ化した、オーソン・ウェルズの作品が、長時間の放送で、しかも余りにも真に迫つたものであつたために、始めの部分をよく聞いていなかった聴衆が、本当に起つた事件と勘違いして、パニック状態に陥り、大騒動に発展するという、日本では、一寸考えられない事件があつたわけですが、恐らくアメリカにも似たような緊迫した空気があつたことだったのでしょう。

更に、十四年の暮には、ドイツのポケット戦艦アドミラル・グラフ・シュペー号が、英国艦隊に追いつめられて、ウルグアイのモンテビデオ港外に自沈する騒ぎもあり、日支事変と共に、ヨーロッパの戦雲も、ようやく全世界に深刻な影響を与え、世界情勢は、次の大戦へ向けて、正に、一触即発の様相を呈していました。

このような背景の中で、誕生した偕行社中学も、翌十六年には、名前を山水中学と改め、太平洋の苛烈な戦いの余波に翻弄されながら、二十年に終戦を迎えます。それは、まさに、何かにつけて、戦時標準型と邪揄されて来た私共の年代が、経て来た過去の投影であり、象徴でもありました。この学園の成立過程は、私共の年代のものとしては、とりもなおさず自分自身の成立過程でもあります。それは、私達にとっては、涙なくしては語ることの出来ない時代でした。

戦後の混乱は長く続き、学生改革で旧制の中学も消えて、昭和二十六年に、同志社との合併が成立します。同志社香里中学・高等学校が誕生して、今年で三十年になります。

(同志社香里中学校・高等学校長)